

研修医・指導医リレーエッセー^{③④}



初期研修から20年、今度は伴走者として

岡山医療センター 糖尿病・内分泌内科／教育研修部 片山 晶博



国立病院機構岡山医療センター糖尿病・内分泌内科の片山晶博と申します。2004年、現在の初期臨床研修制度が始まった年に、私は岡山医療センターで医師としてのスタートを切りました。研修制度の第一期生である私たちだけでなく、指導する先生方にとっても、手探りで始まった研修だったのではないかと思います。あれから20年以上が経過し、私は再び岡山医療センターに勤務し、今度は研修医を指導する立場になりました。かつて教えを受けた場所で若い医師たちと向き合っていると、不思議な巡り合わせとともに、過

ぎた年月の重みを感じます。

私が初期研修医であった頃と現在とでは、医師を取り巻く環境は大きく変わりました。働き方に対する考え方はもちろん、医学知識を得る方法も、紙の教科書や文献を中心としていた時代から、オンラインで最新の情報に瞬時にアクセスできる時代へと変化し、この数年はAIの進歩も目覚ましいものがあります。かつて指導医の先生方から受けた教えの中には、今も変わらず大切にすべきものがある一方で、その指導方法をそのまま現在の研修医に当てはめることが、必ずしも最良とは限りません。何を伝え、どこまで任せ、どのタイミングで手を差し伸べるべきなのか。研修医一人ひとりの個性や目標にも目を向けながら、日々、指導のあり方を模索しています。

こうして考えると、指導医とは、完成した医師が一方向的に教える立場ではなく、研修医とともに学び続ける存在なのだと思います。同世代の先生方がそれぞれの分野で活躍する姿にも刺激を受けながら、私もまだまだ成長し続けたいと考えています。

私はマラソンを趣味としていますが、医師としての歩みは、ゴールの見えないマラソンに似ているように思います。順調に走れるときもあれば、思うように前へ進めないときもあります。それでも、周囲の仲間から刺激を受け、支えられながら、一歩ずつ進んでいくことが大切です。研修医の先生方にも、初期研修を通じて、長い医師人生をともに歩んでいける仲間や先輩と出会っていただきたいと思います。初期研修が、多くのことを学べるだけでなく、かけがえのない出会いに恵まれる場となることを願っています。そして私も、研修医の少し先を走る伴走者として、ときには彼らから新たな力をもらいながら、これからも同じ場所で走り続けていきたいと思っています。



研修医時代に参加した鹿田レガッタ = 右端が筆者